
龍騎士物語

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍騎士物語

【Nコード】

N3467V

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

今日から中学3年生の主人公和馬による龍と魔法を廻る冒険ファンタジー

第1章 くコトの始まり

この話の主人公、龍野和馬はこの春、中学3年生になる。和馬はその時、学校の屋上にいた。

「ハア・・・僕も受験生か・・・面倒くさいな」和馬は俗に言う厨二病と言うものに感染している。そして、重度の進行率と言える。「なんか・・・こつ手から火とか出ないかな」

和馬は右手を空に向け、自分で考えた呪を紡ぐ。

「シャイニング・ダーク・フレア！」

もちろん、そんな物が出るはずもなく、何も起こらない。春風が和馬の頬をなでた。

「うう・・・まだ肌寒いな。教室に戻るか」

屋上に繋がる階段は、たった一つ。その階段を使って、教室に戻ろうと階段の扉を開けた。

「貴公の願い。叶えてやるのも悪くない。」

突然後ろから声が聞こえた。若い声だったが、どこか包容力がある声だ。和馬はそのことに気がついたが、後ろを振り向かず階段を降りる。

「貴公にその気があるのかと聞いているのが分らんのか」

声の主は同じ年ぐらいの少女だった。なぜか緑のチャイナドレスに碧い目。金色の長髪。右手には、魔法使いが持つような杖を持っている。

「一体何を僕にするつもりなの？っていうか君誰？」

「自己紹介がまだだったな。私の名は、シャーナ・ジ・アンケルノ。イギリスのとある王国に所属している王家の者だ」

和馬は王家と言う言葉に少々の反応をしたが、言葉を発する前に

「呼び名は略称のシャナで良い」

「それなら、シャナ。僕に何をしてくれるんだい？」

「貴公には、我が国の兵士として戦ってもらいたい。そのために、我がアンケルノ家の術を使って力を覚醒させてやるというものだ」

「そのさ！力つてさ！もしかして、火とか出せたりすんの！？」

「個人差がある」

「でも、可能性はあるんでしょ？」

「もちろんだ」

「じゃあ頼む」

「代償として、我が国の戦争に参加してもらおうぞ」

「いいよ。でも、可能性はあるんでしょ？」

「もちろんだ」

「じゃあ頼む」

「契約の条件は一つ。王家を巡る戦争を勝利というカタチで終わらせることだ」

「な、だから何でもしてやるって言ってるじゃん気が変わらないうちさ」

「契約成立だ。主、名は？」

「和馬。龍野和馬だ！」

「では、和馬。左腕を出せ。」

和馬が袖を捲り、左手を突き出す。その左手にシヤナがキズを付け、そのキズに杖の先を突っ込んだ。和馬の悲鳴が辺りに響いた。

「我慢しろ。こいつは直接体内に注がなければならぬのだ」

和馬は痛みをこらえながら、うなずいた。

「我がアンケルノの名の元にこの者に力を与えよ。ブレイクスルー！」

杖の先から青いもやもやした光が放たれ、傷口に入っていく。そして、全部の光が入った所で

「主。私の罪を許して頂き、感謝します」

「あ、あのさ・・・杖、抜いてくれない？」

「あ、す、スマン。」

シヤナが杖を抜いた瞬間。和馬の腕から血が吹き出した。驚愕。そ

の一言で表せる。

「な、な、な、何これ」

「おう。龍の力ではないか。これまた珍しい」

吹き出した血の色は『緑』。人の血ではない。

「おいふざけんな！ さつさと血を止めてくれ！」

「スマンスマン。そんなに叫ばなくても分かっておる」

今度は杖ではなく、手をかざす。

「回復の象徴、グリーンゴッドネストドラゴンの力を引用。主の力を貸し与えたまえ」

シヤナが呪を紡ぐと傷口が塞がっていき、傷口の後が残っただけで綺麗に治った。その時。

和馬の皮膚が燃えるように熱くなった。和馬の叫び声がもう一度響く。

「コイツのメンタルはカステラ以下か？」

徐々に痛みが引いていく。和馬は自分の腕をもう一度見た。腕は緑の鱗に覆われている。

「こ、コイツは・・・一体？」

「龍の力。龍騎士だ。希少な力だな」

「どれぐらい希少なさ？」

「一国家に1人いるかないくらいだ」

「それってすごくね？ めっちゃすごくね？」

「だから、希少だと言っただであらう言っておくが、私は貴公の対の力。龍殺しだ」

「ありやま、なんかそっちの方が強そう・・・」

「それぞれには、魔力の強さがある。龍騎士は+龍殺しは-だ」

「ほう、つまり？」

「同じ系統の奴との協力術式つーもんが作れる」

「融合魔法つてヤツ？ カッコいいじゃん！」

「元々龍騎士の数は少ないと言っただろうが」

「可能なんですよ？」

「龍殺しにはそう少なくない」

「最大出力つてどれくらい？」

「指数にして人間には【5】が限界」

「それを超えると？」

「墮龍となり、人には戻れなくなる」

「なんか、楽しみになつてきたー！」

シヤナは和馬に呆れて、会話をやめて地面に魔方陣を書き始める。

「移動するぞ」

「どこに？」

「イギリス」

「ハア！？いきなりすぎる！なにそれ！？」

「まあ、言うと思った。一日だけ猶予をやる。友人と別れでも告げてこい」

「OK！」

和馬は急いで教室に戻る。階段を降りようとした時だった。

カラン

と金属音が響いた。

「あ、落としちゃった」

和馬は落とした金属板を拾う。その金属板には、

「し、シャクソンの・・・家紋・・・だと？貴公！何者だ！」

「家紋？あ、これ？おじいちゃんから貰ったもんなんだけど、カッ

コいいしなんか持つてると落ち着くんだ」

「なんてことを・・・私は・・・」

「一体コレが何なのさ？」

「今回の戦争の相手のシャクソン家の家紋だ。ああ・・・主よ・・・

哀れな私を許してください」

「????？」

和馬がその場を離れようとした時。

「私の罪を流す方法はたった一つ」

ドツという音と共に和馬の懐にシヤナが入りこみ、腹に刃物を突き

刺そうとする。

「貴公を亡き者にすることっ！」

和馬は反射的に龍を呼び出し、堅い鱗は刃物を弾いた。

「クツ・・・さすが龍騎士と言ったところか」

和馬の背中から翼が生え、天井を突き破って空を飛んだ。

「飛竜系緑龍種か・・・ならば私の滅龍魔法で！」

シヤナは地面に手を着けると、手を中心に魔方陣が展開され、魔方陣から槍が召喚された。

「滅龍槍術雷式放雷！」

シヤナの持つ槍から放たれ、和馬に一直線に向かっていく。

「これが、滅龍魔法か。ぶった切ってやる」

和馬は自分の魔力を左手に集める。指数にして+5シヤナのは-5よって、二人の魔力は打ち消された。

しかし、和馬の落下スピードは変わらず、そのままシヤナに向かって突っ込んでいく。

「シヤヤヤヤヤナアアアアアアアアアアアアアアアア！」

和馬のツメがしつかりとシヤナの首を捉え、掴んだ。このまま力を加えれば死ぬ。

「なぜそこで止めるのだ？私をさっさと殺せ。それでコトはおしまいのはずだ」

和馬の目が元に戻っていき翼が消え、鱗がなくなっていく。

「馬鹿・・・僕が恩人を殺せるわけじゃないじゃないか」

「なぜだ・・・なぜ私を辱める！私は・・・負けたのだぞ・・・」

「命を奪って喜ぶようなヤツは悪魔同然だよ。それに、君の家族が悲しむ」

「・・・たとい自分を殺そうとしたやつでもか？」

「うん。たとい自分勝手な理由だったとしても、死に意味はない。だから」

首から手を離し、一步下がって

「だから、君を許すよ」

「・・・借りがデキてしまったではないか」

「(うわぁ・・・僕カッコよすぎじゃね？なんかマジかっけー！」

第2章 く友の真実く（前書き）

原作はできているのですが、pcに打ち直すのがしんどい・・・

第2章 く友の真実く

シヤナが立ち上がり言った。

「では、行くとするかな」

「また来るんでしょ？」

「来る。お前も必ずこい」

シヤナはまた魔方陣を書き始める。

「私の作ったオリジナル術式。龍の鎮魂歌を体内に展開させてもらドラゴンレイエムうよ」

「なに？それ」

「簡単にいうと、爆弾だ」

「爆・・・弾・・・？」

「アンケルノの力を使って覚醒させた力だ。その技術が外部に漏れては困る」

和馬は驚いた。今日。たった今交わした契約は自分の思ったより断然重いモノだった。

「いや、なに。こりゃいいんだよ。うん。それに私のその術式は強力で、一発で半径2km位は吹っ飛ばす。あまり使いたくはない」

「あ、そう。こればいいんだね？」

「そそそ。深夜にはここにいる。それまでにくれれば良い」

二人は軽く言葉を交わし和馬は教室へ、シヤナは屋上に魔方陣を描いてどこかへワープする。

和馬が真っ先に向かったのは親友。海野純一。隣のクラスの幼なじみで、小学校のころから仲が良い親友だ。

「ねねね！純！僕さつき、外国の人と会ったんだ！」

「だから純って呼ぶなっつってるだろ！」

和馬は純と呼んでいるが、純一は純と呼ばれるのを嫌っている。女みたいな呼び方だからだ。

「これ見てよ」

キインという音と共に、和馬の目が龍のモノに変わる。

「ワアオ！なんの手品だい？」

「て、手品って・・・純の馬鹿！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさか・・・な」

純一は小声で呟いた。

和馬は売店に向かって走って行く。ここの購買部には、ヤキソバパンが売っていて、和馬の目的はそのヤキソバパンだ。

「どうして純まで信じてくれないんだ・・・」

購買部のヤキソバパンを手に取りろうとしたとき、

「コイツが最後の一個じゃん」

購買部のおっちゃんがいうと、遠くからこの学年で一番強いってウツサの人が来た。

和馬はすでに、ヤキソバパンを買っていた。

「おまえ・・・龍野・・・だっけ？そのパンくれよ」

「僕が買ったんだもん」

「ああ？ヤンのか？」

「どうぞ？」

和馬がそう言った瞬間。周りの人間が離れていく。危ないと感じたからだ。

「ずいぶんナメた態度してくれるじゃないか龍野」

「さあ、そっちからどうぞ」

「はいはい。んじゃ、こっちからいかせてもらおう！」

殴りかかってくる瞬間に和馬が龍を放ち体中がウロコに覆われ、翼が生える。そして、拳が和馬のみぞおちに入った。

が。

「ケツ！痒い。痒いよそんなの」

堅い鱗は衝撃を和らげる。周囲の人々の顔色が変わった。殴った本人も驚いていた。

「殴るっつーもんは、こうやるんじゃなかったか？」

和馬が拳に魔力を集める。指数は+4。手加減はしたつもりだった。

しかし、魔力には自然に属性が付与する。和馬の飛竜系緑龍種の属性は炎。なにもしなくても、自然に炎の属性が与えられていた。和馬の拳に炎が灯される。そして、和馬は炎拳を放った。その炎拳は綺麗にみぞおちに入り、相手は炎に包まれた。辺りに悲鳴が響く。

「おい。もうおしまいか？あぁ？」

和馬がまた魔力を集める。今度は右足。指数にして+5。最大出力だった。そして、力の限り蹴り飛ばしそのまま壁に当たり、大きく壁がへこんだ。ドン！という音がし、それに気がついた教師陣がやってきた。

「ど、どうなってるんだ・・・こいつは学生が使う力なんてもんじやないぞ！誰だコイツをやったの！？」

一斉に和馬に視線が集まった。

「おいお前なのか龍野！？ってか、なんだそのコスプレ？」

そこに、純一が走ってきた。輪になっていた人ごみの中から飛び出してきた。

「純！助かったよ！さ、逃げるよっ」

「さつきはただの冗談だと思ってたけど・・・本当だったなんて」

「え？さつきのやつ？これだよこれ！どう？カッコよくない？」

「なんでその力を得ようと思ったんだ！？」

「いや、カッコいいじゃん」

「契約の条件は！？」

「戦争の参加と勝利。簡単なことでしょ？」

「簡単？あぁ、簡単だよ。でも、でもそれは自分の人生捨てるようなもんか？人生捨ててまでやらなきゃいけないコトなのかよ！？」

「戦争が終わったら僕はまた自由になる。別に捨ててなんかいないさ」

「人殺し」

「人殺し？僕は龍騎士の力。人なんて、まだ一人も殺してなんかいない」

「いや、もう一人死んでいる」

「一体誰を殺したっていうのさ!？」

「……お前は俺の親友を殺した。龍野和馬を殺したんだ」

「はあ？僕はここにいるじゃん」

「いままでのただ純粋な和馬はもうこの世にいない。ただ、穢された術を使う同姓同名の人間が現れただけだ」

「……」

「俺はお前にその術を使ってほしくなかった!」

「……え？その言い草はなんか龍騎士を知ってるよ
うな言い方だけど」

「当たり前だ。俺自身が龍騎士なんだから」

「……なんだって?」

純一が和馬に近寄り、小声で話す。

「ひとまず逃げるよ。下手に騒がれると困る」

純一は地面に手をつき、魔方陣を展開する。魔方陣に描かれているのは、【龍】。それは、魔法によって龍を制するという意味があった。

和馬と純一の回りが激しい光に包まれる。目が眩んでるうちに二人は屋上に行った。和馬は元の姿に戻っている。

「純！一体どこまでが本当なんだ!」

「……もちろん全部だ」

「龍騎士なんだろう？さつさとなれよ！証拠を見せろ」

純一は一步前に出て、左手を前に突き出した。肘の辺りになにやら切れ目があるのがわかった。

「こいつを見せるのはあんまり気が向かないけど……」

純一がその切れ目を掴んで、剥がした。そこには青い鱗に覆われた人間の腕があった。龍騎士の証。一国家に数人いるかいらないかと言われた力が和馬の他にもう一人、和馬の親友がその力を持っていた。いままで一緒に過ごしてきた親友はずっと自分が龍騎士だということとを和馬に隠していたことに和馬はショックを受けた。

「俺の龍は海龍系水龍種。この力は小6の時に受けた。契約相手は第91代皇帝ゴール・ジ・アンケルノ。俺の父親だ」

「え？じゃあさ、純って皇太子？うそん皇太子だったりする？」

「隠し子ってコトになるけど、一応そうだね。ハーフだ」

たしかに和馬も身長が日本の普通の人より大きかったし、純一の目が青なのをずっと気になってたし、顔立ちはどこか白人染みてたことをずっと謎に思ってたが、ようやくここでその謎が解き明かされた気分だ。

「とことんカッコいいなおい！純はほんと、うん」

「え？ちよ、いままでの話聞いてた？」

「うん。要するに純がカッコいいってことでしょ？」

「……馬鹿だこいつ」

「馬鹿は承知だよ」

「うう……即答されるとなんか……」

「出発みたいなんだけど、今日で良い？」

「俺も行くよ」

「え？なんで？僕の契約だよ？」

「学校が面倒くさい」

「ちよ、お前そんなヤツだっけ？」

「うん。っていうか、契約内容がついていくことになるかな？」

「どゆこと？」

「うん。ゴール・ジ・アンケルノと結んだ契約内容。そして、それは俺が俺自身に刻んだ名。アンケルノの名だ」

「なにそれカッコいい」

「俺の名はProtect136。意味は大切な友を守る」

「うわ……僕も欲しい……」

「いっぺんお前はその根性を叩き直した方がいい」

「で、くるんでしょ？」

「おう。学校はお前どうする？」

「学校？あれはただの通過点だよ。シヤナに夢の種を貰ったからね・

・人生は夢のためにあるんだ。そして、学校はただの人生の通過点でしかない。その裏道を貰ったんだから、もう夢を見つづけるための学校は必要ない」

「いい覚悟じゃん。さ、行こうぜ」

二人は屋上に寝っ転がり、夜を待つ。

「お、和馬もう来てたのか。で、そっちのアナタはどなた様かな？」

「俺は海野純一。ゴール・ジ・アンケルノの息子であり、龍騎士の力を持つてる」

純一は鱗をシヤナに見せ、説明した。シヤナは目を見張った。国家に数人いるかいないかの希少な龍騎士が目の前に二人もいる。その事実がありえなかった。

「龍騎士・・・か・・・ゴール様の話は本当か？」

「父さんにアンケルノの名も貰った。基本的な魔方陣なら使える。別に戦力としては申し分ないだろ？」

「よかるう。では、和馬にも名を与えねばな。和馬。戦う理由はあるか？」

「理由・・・」

和馬は考えてみた。でも、思いついた理由は一つしかない。右手を胸に当て、言い放つ。

「夢のために僕は戦う」

「夢・・・か・・・お前らしいな和馬」

夢は英語で Dream。普通は動詞にするものなのだが、名詞でも問題はない。

「まだ皇帝に確認取ってないからケツの番号はわかんないが、Dreamで問題ない」

シヤナがチョークで魔方陣を描いている。魔方陣に囲まれた龍。アンケルノの家紋をアレンジした魔方陣で、これはアンケルノ城とリンクしている。

「では、二人共。この中に入れ」

シヤナに呼ばれた二人はすぐに魔方陣の中に入った。シヤナは空を

確認している。

「3、2、1、」

「え？ちよ、何？」

シヤナはその言葉を無視して、呪を紡ぐ。

「我が城へ……」

第2章 く友の真実く（後書き）

どの作家さんともかぶってなきやいいなー

第3章 王家と王家の戦争（前書き）

最近はpcに打ち込むのが辛いわー

なんでUとIとOが並んでる訳？マジで押し間違えるんだけどww

w

第3章 王家と王家の戦争

シヤナが呟くと、世界が高速回転する錯覚を覚えるような感覚に和馬は襲われた。治まったところには、そこは学校の屋上ではなく、絵で見たような白い城の一室だった。和馬は辺りを見まわすが、どこかは見当がつかない。

「ここは、我らアンケルノ家の城。アンケルノ城だ」

「そのままだ」

「うん。そのままだな」

「う、うるさい！これが、皇帝のセンスなのだっ！」

シヤナが若干恥ずかしそうに答えた。そして、窓の外を指差して

「アレが見えるか？あれが今回の戦争の敵。シャクソン家の城だ」

「戦争はまだ始まってないの？」

「始まっているが、今は休戦中だ。どちらも由緒正しい王家の一つだ。ルールを破ることなどはない」

「ルールの詳細を教えてくださいに急に話を進めたな」

「おう、これは失礼。元々この国は交互に皇帝を決めていたのだ。

しかし、向こうの次期皇帝候補の方が我らの次期皇帝よりも優れていると言いつ出し、戦争を始めた。どちらも元をたどれば同じ先祖なのだが少々ばかり考えが違ってな、我らが信仰するものは龍神。彼らが信仰するものはないという大きな違いがある」

「こっちは宗教で向こうはそんなものがないってこと？」

「まとめるとそうだな。彼らは我らの龍神を否定し、唯一彼らが持っている科学力で対抗していると言える。それなのに、龍騎士を人工的に作るのに成功しているという恐ろしい国家だ」

「人工的に・・・龍騎士を？」

「なにやら龍騎士の種という概念を発見したらしく、向こうには龍騎士の小隊が15人編成で存在するというウワサだ」

「んで、こっちの龍騎士は2人と」

「いや、3人だ。もともと我が国家には一人優れた龍騎士がいる。元々は貴公達と同じ学生だったカレン・ジ・アンケルノがいる」

「で、その人の龍は何なのさ？」

「七龍系炎龍類古龍種。伝説級の力を持つ龍の一匹だ」

「うわぁ・・・なんか僕、自信なくしたし」

和馬から黒いオーラが放たれる。希少な力だの、シヤナに勝る力だの言われてテンションが上がっていたのを自分よりももっと役に立つ人がいるときいて、テンションがガタ落ちである。

「問題ない。貴公の力は強力で、私を打ち負かしたでないか」

「あれよく考えたら、僕が落下スピードでそのままぶつかっただけじゃん。」

「まあまあ和馬。名前貰うんじゃなかったのか？」

「あ、そうだった！」

和馬はとても単純なヤツだなと、二人は心の奥底で思った。シヤナは二人を連れて部屋を出て、廊下に出る。

「デカさってどれくらいな訳さ？」

純一がシヤナに聞いた。シヤナは歩くスピードを変えずに答える。

「貴公らのなんだ・・・あの・・・体育館と言ったものの10倍程度だ」

「じ、十倍って・・・どれくらい？和馬？」

「うんと・・・バスケットコートが20個かな？」

「・・・。。。。。。もう、わっかんねえや」

静かに3人は歩いていく。廊下は永遠に続いているのでは？と錯覚させるほど長かった。そして、しばらくたつと、

「ついたぞ。ここが皇帝のいる部屋だ。入れ」

シヤナが大きな扉を開け、中に二人を招き入れる。

「ただいま戻りましたシヤナ・ジ・アンケルノでございます」

「よくぞ戻った。で、戦力補強になりそうな人材はどれほど？」

「はい。龍騎士が二人であります」

「おお！龍騎士であるか！それはまた希少な人材を・・・」

「しかし、問題点が一つありまして」
「ほほう」

皇帝と呼ばれている男は見た目60後半でサンタのような白い長い髭を生やし、手には和馬の身長分程の長い剣がある。

「その小さい方の少年はシャクソンと関わりを持っています」
「シャクソンの人間とな？」

「ええ。しかし、私めが龍の鎮魂歌をすでに組み込んだ後で御座います。逆らう素振りを見せた瞬間に発動できます」

「うむ。ならば問題なかるう。もう一人は？」

「はい。91代の息子だと言っておりますが」

「ハーフであるか。よかるう。すでに名は父上から貰っておるのだらう少年？」

「Protect136（大切な友のために戦う）ですね」

「被りはなさそうだ。よかるう。その少年は話は聞いておるうな？」

「もちろんさ。夢のために、僕は戦う」

「Dreamか・・・916などどうだ？」

「はい！ありがとうございます！」

「夢の少年はここに残るがいい。ちよつとばかり話がある」

シヤナと純一は部屋からでて、外で待っている。和馬は一人皇帝の前にいる。その顔には緊張の表情が現れている。

「夢の少年。ヨハネの黙示録と言うモノを知っているか？」

「聖書の一つと言っぐらいは」

「この剣は、そのヨハネの黙示録に登場する大剣だ」

「その剣がどうしたんですか？」

「私には少々ばかり未来を透かす能力を持っているのだ。そのなかで、夢の少年。そなたがコヤツを持っているのを見た。コヤツを与えよう」

皇帝は長い大剣を和馬に渡した。和馬は改めて大剣を見た。大木さは和馬とほとんど変わらない170cm弱の長さで、柄の部分は3

0cmほど横幅は60cmほどの剣だった。

「持ち運ぶには大きかろう。召喚魔方陣を組んでやるから、こつちに来い」

和馬は言われた通りに皇帝の目の前まで歩いていく。そして、皇帝は魔方陣を描き始める。魔方陣に囲まれた龍。アンケルノの特殊魔方陣だ。龍の眼球の場所に剣を突き刺し

「さあ、この魔方陣に血を滴らせ」

和馬が剣の刃に軽く指を擦り付けると、ピツと指が切れ血が滴る。

「この召喚魔方陣はシャナが覚えているから、頼めば召喚できる。

さ、もういいぞ。龍騎士のカレンにでも会ってくれば良い」

では。と和馬一言言って部屋から出る。外ではシャナと純一がいた。

「で、なんだって？なんかあった訳？」

純一にヨハネの黙示録について話しても分かるはずがない。和馬もたまたま自分で自作小説を書いていた時の出てきて調べただけで、詳しくは知らない。

「何か、家族はいいのか？つー話だったよ」

「あ、そうなの」

元々深入りするつもりはなかったらしい。すぐに納得してくれた。

「シャナ。カレン・ジ・アンケルノの所に連れてってよ。この国の龍騎士つてのに会ってみたい」

「わかった。開始まで後2時間しかないしな」

カレン・ジ・アンケルノは龍騎士部隊の隊長。七龍系炎龍類古龍種の龍騎士で、七龍系は滅龍魔法の土台になるほど有名な系統で伝説にまで登場するものだ。

「あ、シャーナじゃない。戦力補強の子達は見つけたの？」

カレン・ジ・アンケルノ。炎龍の宝玉を持つことにより炎龍の力を手に入れた龍騎士。元々の龍は飛竜系走龍種。飛ぶことより走ることに特化した珍しい龍だ。もう一つの名はNecessaria 637（必要ならば我が身を捨てても）

「カレン。シャーナと呼ぶのはやめると何度言ったらわかるのだ？」

シヤナで良いと言ってあるだろうに」

「もう、シヤナちゃんつたら。もっと女の子っぽい喋り方しないと彼氏もできないよ?」

「軍人に愛人などいらぬ」

「またまたあゝほんとはそこの子狙ってるんでしょ?」
ビクン!

とシヤナの体が反応した。

「あららゝ凶星だったのね?どっちの子かしら?さ、私にだけ耳打ちしなさいよ」

「こ、断るっ!」

シヤナの顔が赤くなる。いままでこんなことがなかったのか、慣れていないのかは分からないが、動揺しているのは確かだ。

「なんて緊張感のない軍人なんだ・・・」

「純!それ聞こえたら何されるかわかんないよ?」

「あら、戦略会議のほうがお好みだったかしら?」

和馬から純一に、ほーら言わんこっちゃないという視線が送られる。

「作戦は、簡単にいうと私が敵戦力を散らしてる間に純一君が城の護衛を攪乱。和馬君は、その間に向こうの皇帝をとつ捕まえたらOKって感じ。いい?」

「新入りなのにそんな重要なとこついちゃうもんなの?」

「何言ってるのあんたら龍騎士でしょ?あ、シヤナは私の軍についてきてくれればいいから」

「了解した」

「さ、準備して。もうすぐ開戦よ」

城の中からカウントダウンが聞こえる。この声は皇帝のものだ。

「3、2、1、」

小隊。軍。すべての人の呼吸が止まる。

「進撃!!!!!!」

戦争の開戦と共に人々の怒号が響く。剣を持つ者。銃を持つ者。矢を持つ者。槍を持つ者。そして、3匹の龍が戦場に放たれた。

和馬が純一を抱きかかえ、飛んでいる。シャクソンの城まで残り約500m。その時だった。

「シャクソン軍全員に伝える！龍騎士部隊を開放する！周辺の兵士は相手軍から遠ざかれ！」

城からの声。恐らくシャクソンの皇帝によるものだろう。そして、城の前方部分が大きく開く。そこには

人工の龍騎士がいた。人工の龍騎士はざっと数えただけで数は100ほど。の碧の龍。紅の龍。純白の龍。漆黒の龍。色々な種類の龍騎士がそこにはいた。

一瞬だけ。

そこには、様々な魔法攻撃がなされ、龍騎士はほとんど消え失せた。指示をしたのはカレン・ジ・アンケルノただ一人。和馬の目には信頼と信用と、チームワークが見えた。

「弓部隊はF17地点に集中放射！滅龍部隊は弓部隊の弓に滅龍魔法を打ち込み、攻撃の強化。シャナは龍の鎮魂歌の用意！」

的確な指示だった。和馬達に聞かせてないだけで作戦は大量にあった。シャナが龍の鎮魂歌の魔方陣を描き終え、もう一つ魔方陣を描く。

「召喚魔方陣展開完了。召喚！アバドン！」

アバドンと呼ばれた生物は龍の鎮魂歌の魔方陣を付けられ、シャナの命令一つで龍騎士部隊に突っ込んだ。シャナが魔方陣を足で踏むと目の前で大きな大爆発が起こった。龍騎士は恐らく一掃されただろう。原理はよく分からないが、シャナの最高級の滅龍魔法と言うことが分かった。

「下ろすよ純。僕も行かないと」

「あいよ。どうぞ」

和馬は純一を下に下ろし、自分も城に侵入する。純一は龍の目で水脈を見つけ、魔力を注いで水を発生させる。純一の海龍は水を操ることで戦いをしやすくする龍で、水流を自分で操れる。

「純！なんか一発ブチこんで！」

第4章 くコトの精算く（前書き）

週一更新目指してがんばるさく

第4章 くコトの精算く

「か、和馬ってば何してくれてるんだかッ！」

カレン・ジ・アンケルノが赤髪を揺らして和馬の所に走る。和馬は戦争の意味を履き違えている。この戦争はそのようなモノではない。ただ殺し合いをすれば良いモノではなかったのだ。

「あ、カレンさん！ここでーす！和馬でーす！」

和馬がカレンを見つけて大声で呼ぶ。カレンもそれに気付いて速度を上げた。残り300mその時、和馬の視界に入ったカレンの顔を見た。

――――鬼が襲ってきた。

「え？ちよ、ちよつとカレンさん！？」

鬼は和馬に向かって時速約160kmで突っ込んでくる。

「（ちよつとちよつとどないしたのさ！？一体何があったっていうんだああああああああ！）」

「かずまああああああああ！よけいな事をおおおおおおおお
おおおおおおおおおお！」

「ちよと待てつて！そのままきたら死」

ゴン！

時速160kmでの衝突。普通の人間ならただではすまないだろうが、龍騎士は普通よりも丈夫にできている。衝撃で城が崩れるような錯覚に襲われた。

「ちよつと！何してくれるんだ！」

同時に言葉を発した。和馬は目を開けられなかった。理由は

何だか少し重いモノが和馬の体の上にあったからだ。目を開けるのが怖かったただけなのだ。

和馬は簡単に振り回していたが、実際はあれだけで軽く10kgはある。

とつさに和馬が右に転がり間一髪避けることが出来た。落ちたのは和馬の顔横3cm。

「（ちよつ死ぬ！絶対死ぬと思った！きゃー怖！わけわかんねえ・あんな所から落とすか普通？しかも僕は何もしてないし！！）」

剣の落ちた衝撃で純一が気付き、和馬の所に走ってきた。横に刺さっている（上から落ちてきたことは知らない）剣を見て、

「和馬！一体何があったんだ！」

「邪魔すんじゃ・・・ねえよ！」

カレンが上からのジャンプ。純一が驚いて3歩下がる。そして、和馬の顔を見た。

「和馬。まさかお前がカレンさんに手を出していたなんて・・・応援するぜ」

「やめろっ！そんな爽やか風に言っても変わらないからな！」
ドン！

というカレンの着地音と共に和馬の悲鳴が上がった。落下地点が和馬だったのではなく、落下した瞬間に和馬を思いつき蹴り飛ばしたからだ。

「まあまあ、そんなに怒らなくてもいいじゃないのカレンさん。勝つたんだし」

「怒らずにいられると思う！？コイツは家族を殺したんだぞ！！」

「え・・・？だつて、さつきシヤナも龍の鎮魂歌を発動させて派手に殺してたじゃない」

「龍の鎮魂歌は龍騎士の魔力を一時的に無効化させる術式で殺してなんかいない！」

「つてか・・・家族？」

「話をシヤナから聞いてなかったの？」

「何の事かさつぱり」

「アンケルノとシヤクソンの関係だよ！」

和馬がうう……と言って起き上がったが、二人は構わず話を続ける。

「関係って……なんかあるもんなの？」

「元々アンケルノとシャクソンは元を辿ると血筋は同じってことは知ってる？」

「あ、それはシャナが言ってた」

「なら、家族を殺すことはどれだけ重い罪かは分かる？」

「あんまり日本でそんなのなかったけど……児童虐待とかは知ってる」

「じゃあ、それでいいわ。それでも大抵は3年はブタ箱の中ね」

「軽くて3年……」

「あ、あの……？僕忘れてませんか？」

「「アンタは黙ってて！今大切なところ！」」

和馬が二人の会話に入ろうとしたが、あっさり断られてしまった。

二人の間に不穏な空気が流れた。

「僕はこれでも主人公なん」

「「黙ってるって言っただろうが！！！！」」

和馬はしょんぼりして外に出た。もう、あの二人の話には入れそうにない。

はあ……とため息をつき、寝転がった。そよかぜが和馬を慰めるように吹いた。

「風……お前は僕を慰めてくれるんだね」

こんな状況で和馬の中二病が発動。きつと周りに人が居たらドン引きしていたであろう。そして

ジャリ

と砂を踏む音がした。まだ城の中から会話が聞こえている。純一とカレンではないだろう。

では、一体誰だ？そんな疑問が和馬の脳裏をよぎった。

「龍野和馬か？」

「え、ええ」

「貴公を殺人容疑と器物破損でアンケルノ城へ召集命令が出ている。いますぐ出頭せよ」

堅苦しい男の声だった。よく見ると騎士服を着ているが、顔は見えない。身長は170cm程。手には映画で見た王からの召集状的な何かを持っている。

「あ、あの〜僕ってどうなっちゃうんですかね？」

「貴公か？恐らく死刑だな。最低でも国外追放だ」

「最低で・・・国外追放・・・」

和馬はまだ死と言うモノの自覚がない。でも、国外追放というモノが重いことなのは分かった。今から逃げ出してやるうかとも思ったが、シャナに龍の鎮魂歌の術式を組まれている。逃げ出したとしても捕まるのは明らかだ。

「分かった。行くよ」

「ご協力感謝致します」

「あ、ちよつと待って」

和馬が二人のいる城を向き、魔力を注いだ。色は白の壁に合わせて、騎士に見えない様にした。龍騎士には魔力の流れが見える。それに期待して和馬は文字を刻む。刻んだ文字は

【捕まった。純。カレンさん。城に来て】

第4章 くコトの精算く（後書き）

pc難しいし・・・うん。塾なかつたときしか触りずらいお

第5章 く選別の二戦く（前書き）

お父上がいる間ツイ禁しておるのです。書き溜めしとくのですっ
w

第5章 く選別の一戦く

和馬はアンケルノ城の王の間に召集された。そこには兵士が部屋一面にいた。全員がアンケルノの騎士服を着ている。

「龍野和馬。またの名をDream916夢のために。力は龍騎士の飛龍系の緑龍種。違いはないか？」

「はい」

兵士がざわついた。龍騎士がそれだけ貴重な力と言うことだ。確かに、軍力が足りなかったとはいえ、即戦力で戦争に関わったことが異例らしい。

「シャーナ。残念だが、この事は根っこから切る必要がある。一緒に対応を取らせてもらう」

「覚悟は出来ております。必ず帰ってきます」

「おいおいアイツ龍騎士かよ」

「あの年でねえ」

「俺なんて目醒めたのが幻術系だぜ？1対1でしか通じないカスなのによー」

「なに言ってるんだよウチなんて魔女だよ？昔は魔法少女だ！わーとか言ってるけどババアがそんなことやっても誰もそんなの思わないうつての」

「あーあーババアって認めちゃったよ」

なんて会話が和馬の耳に入った。普段なら

「ま、魔法少女とか（笑）」

という会話で軽く一時間は話せそうなもんだが、この王の間の空気ではできない。ちゃんと空気を読める和馬だった。

「では龍野和馬。処分を言い渡す。処分は」

和馬は息を飲む。周りの空気が凍った。最低でも国外追放。下手をすると死刑になるような瞬間だ。その時

「や1分と持たないじゃないですか！」

「ずいぶんナメた態度とつてくれるねえカレンさん」

純一から黒いオーラが放たれている。ように見えた。自分の力量が足りてないと思われたのが気に入くない。

「さっさと外に出やがれい！俺が倒してやるし！！！！」

「あらそう。和馬はどうするつもりなのかしら」

「僕は純についていくけど」

「ならOKね。さ、行きましようか」

3人は城の外に出た。外は草原が広がっていて、建物らしきものはなにもない。

「久々だな。カレンの炎龍を見るなんて」

「そうだよなー最近はいっつ出したのが最後だっけか？」

「95代のゲルジアスが就任したときが最後じゃなかったか」

「あれってたしかさ、ゲルジアスが気に入くないとか言う理由で戦いを挑んだやつだよな？」

「結局ゲルジアスの逆覚醒にあっさり負けちまったんだよな」

「いやーあれは超見物だったよー。また逆覚醒を使えるような奴出てこないかな」

「いや、アレは伝説級の七龍を使うカレンをやっちまうようなさらに伝説級。血でも繋がってないとそれは・・・」

兵士達が思い思いに喋っている所にシャナが現れた。アンケルノ家の伝統服を着ている。色はいつもは緑だが、黒のチャイナドレスを纏っている。

「皆の者！これよりカレン・ジ・アンケルノVS海野純一による決闘を開始する！両者前へ出てアンケルノ王に頂いた名を交わせ！！」
純一とカレンが前へ出る。純一の表情は引きつっていたが、対してカレンの表情は落ち着いていた。余裕さえも感じられる。

「さっき一分も持たないとか言ってたけど」

「何？事実を述べたまでなんだけど」

「Protect 136（大切な友を守る）」

「Necessaria637（必要ならば我が身を捨てても）」
「では・・・カウントダウンを開始する」

和馬が息を飲む。辺りを緊張が包み込んだ。

3、2、1、

「始め！」

最初に動いたのは純一。先に龍の目を使い、水脈を見つけ魔力を流し込んで水たまりを作った。

「ふうん・・・まず場を整えるなんてあなたもそんなに馬鹿でもないみたいね。でも、そんなので優劣が変わるような七龍じゃないの！」

カレンが少し距離をとり、ポケットから小さなビー玉位の赤い玉を出した。炎龍の宝玉。それは炎龍を倒した経験があることを示している。カレンがその宝玉を飲んだ。

「炎龍を放つまでにかかる時間は約10秒。さて、少しからかいにでも行きますか」

純一はそれまでの間に水たまりを完成させていて、中に入っている海龍を自分の龍とする純一は水を元とした魔力を利用している。元の水を用意することが自分のフィールドとなるのだった。純一が呪いを紡ぐ。

「伊達に龍騎士やってねえんだよ！魔水龍息海龍式！！！」

純一が左手をカレンに向けた。純一の放った術式はカレンに一直線に飛んで行った。

「よつと・・・良い術式じゃん。でも、ちよつと甘いかな」

カレンの炎龍の変化が終わった。体中が赤い鱗に覆われて、背中から翼が生えてくる。その姿は赤く堕ちた悪魔を連想させた。

「さつとと」

ゴウー！

という音で地面から炎が上がり、炎の壁が純一の術式を防いだ。仮

にも水を炎で防いだのだ。純一も和馬も驚きを隠せない。

「びつくりしすぎだつて純ちん。圧倒的な力は属性なんて、関係ないんだつて」

純一の今持っている術式のうち最高級のもを術式ナシで防がれてしまったのだ。力の差だった。

「さつてと・・・そろそろ一分たつし、終わらせるかな」

カレンが術式組む。アンケルノの家紋を元とした魔方陣だった。魔方陣の周りには炎が立ちこめた。

「コイツは七龍が使う専用の術式で、私の持つ最高術式でもあるの。最高術式で終わらせてもらえることを感謝しなさい！裁きの龍息！」

「ならば・・・こちらも最高術式を・・・」

純一も術式を組み始める。魔水龍息よりもさらに上の術式を純一は持っていた。和馬は驚きを隠せない。

「純一もカレンさんも術式を自分で創ってるのか・・・僕も考えとかないと。えつと・・・僕の小説全63作から引つ張ってくるか」まさかのここで中二発動。まったく次が自分の番ということをおぼれている。純一が自分の足元にある水を操り、弓に変えた。矢も水で作る。

「さて・・・行きますか。水弓龍式一千！」

純一の手元から放たれたのは一発なのに放たれた矢は合計で千。術式の意味を和馬は理解できなかつたが、すごいことはわかつた。

ドン！

という音で互いの術式がぶつかる。しかし、炎は消えない。ただ、純一の矢が一本一本消されていく。

「いったでしょ？圧倒的な力の前では属性なんて関係ないつて」

水が蒸発し、蒸気が出る。兵士から声援が上がる。

「さ、盛り上がってきたとこで終わらせますか」

カレンが出力を上げた。グイグイとカレンの術式が押していく。対して純一はすでに出力最大。負けは決した。

「つまり、シヤナにはもつと女の子的に振る舞ってほしいと」
「そそそ。旅の中でそういうのを目醒めさせてもらえると嬉しいかも」

「男2で女1のパーティーで女目醒められても困るんだけどな・・・」
「私もこの3年間努力してもだめだったの。だからダメでもいいの」
「努力つて・・・何したの？」

「えっと・・・化粧を教えろとか・・・あと、一緒に寝るとかかな」

「え・・・／＼／」

「そ、そういうんじゃないの！ただ一緒にお泊まり会しただけなの！」

「お泊まり会・・・お風呂・・・／＼／」

「あんたはそつちにしか頭回らんのか!？」

「健全な男子中学生です（キリッ）」

「どこが健全だ！この変態中学生!・・・さ、行きますか」

「城に戻るの？」

「そう。結果は分かっているでしょうけど、一応報告するのが義務だからね」

「そう・・・純は僕が持っていくよ。カレンさん男のなにするか分かったもんじゃないし」

「どつという想像してるの私に!」

第5章 く選別の二戦く（後書き）

遊ぶの楽しくなってきたWWW

第6章 ～龍騎士殺し～（前書き）

PC崩壊なうWWW

下書きを書き溜めしてる

第6章 く龍騎士殺し

事が終わって今はカレン邸。道具類を貰いに、やってきた。

「いらつしやい。一応一通り用意したから、持って行って」

シヤナは何だか疲れているようで、目のしたに隈ができていた。

「シヤナたんそんな顔してたら可愛くないぞ？」

「だ、黙れ！元々はコイツらが」

シヤナが和馬と純一を睨んだ。

「まーまーシヤナたん。落ち着きなさいって」

「和馬。こいつ殴っていいか？」

「任せる。コイツはこうなると止まらないし」

「ちよ、シヤナさん！？そんなに振り被ったら見えてしまいますよ

！……！」

「何がだ？見られて困るものがあるのか？」

シヤナは止まり、純一に質問した。

「言ったほうが…よろしいのでせうか」

「早く言え。殴るぞ」

もう一度大きく降りかぶって純一を睨みつけた。

「し、白ですか」

「……………」

「ちよ、その術式はまずいです！店ごとぶっ飛ばすつもりなんです

かあああああああああああ！！」

「はいストップよシヤナたん」

カレンはシヤナを羽交い締めにしてとめた。女性陣は変態に対して

は容赦ないのだ。

「あ、後これはプレゼント。昔自分でつかってた道具よ。それぞれ

適正ってのがあからね」

道具は全部で3つ。ガントレットと大砲らしき物、そして蓮の花が

イメージされた銀の杖だった。

「多分これは和馬の。断龍のガントレット。+を・に変換するの」
「左手用なんだなコレ」

「そういうこと。んで、この大砲は純一君に、滅龍砲と言った所かしら。これも+を・に変換するのだけど、これは遠距離って感じよ」
「まあ、つかえそうだけでもな」

「最後にシヤナに、この杖。名前：はないわ。術式構成が主軸のあなたにはびったりなんじゃないかしら」

「恩にきる。何かお礼をしなくてはな」

「もうなにい！？あなたと私の仲じゃないの。きにしないでいいのよ」

カレンは3人を店の外に出し、背中を軽く叩いた。うつすらと涙を浮かべていたが3人も気付いていないようだった。

「はい。これで用は終わり。ささ、行った行った」

カレンは、自分のポケットから炎龍の宝玉を取り出し、和馬のポケットにすべソニませた。和馬自身、その事には気付いていないようだった。

国を出て一体何km歩いたのだろうか。もう国は見えなくなった。

「こんだけ歩いたのになんも起こらないとかどーよ？」

「知るかよ」

「普通さ、こんだけ歩いたらさなんかイベントあるじゃん！卵とか生まれたり変な青い鬼に追いかけられたりさ！！」

「「ねーよ」「」

「えー」

すでに純一の体力は限界に差し掛かってきていた。運動はしていたほうだったのだが、根性は素人以下だったのだ。

「次の町ってさ、あとどれくらいなわけ？」

「もう少しだ」

「さっきからもう少ししか言っていないじゃん！お腹減ったの！」

「んじゃ、ここで昼にしようか」

「構わないが…いいのか？」

「ちょうど水が飲めそうな泉があるし、いいんじゃないかな」

「まあ…いいが」

「やつほーいメシだメシー」

3人はそばにあつた泉のすぐそばに腰掛け、カレンから受け取つたお弁当を開ける。お弁当の中身はサンドイッチで、キレイに仕上がつていた。

「ごっはん ごっはん」

お前いくつなんだと和馬は突っ込みを入れようとしたが、純一に言つてもしかたないと考え、やめた。

純一が口にサンドイッチを放り込もうとしたときだった。

「動かないで！ここの土地は家のもんだ！」

「…………… what?」

そこに立つていたのは、身長150弱で髪は緑色でポニーテールの少女だった。

少女は服の袖口から小型ナイフを取り出し、和馬の首筋に当てた。

「今すぐ金目のものと食糧置いて立ち去りな！」

「貴公、龍騎士の能力を得ているな。波長が同じだ。そのような力があるのなら軍にでも入れば良いでわないか。それとも追放された口か？」

「う、うるさい！お前らには関係ないんだ！！」

「あ、ちよつと脅かしてやるうぜ」

「お、たまにはいいこと言っじやん」

そういつて、和馬はナイフが当てられれる首筋を龍の鱗で覆つた。「ほれ、切つてみ？」

少女は驚きを隠せない。ナイフを地面に落とし、あわわわわ……と言いながら崩れ落ちた。

「な、何で龍騎士がココに…」

「いやー色々あつてさー」

「だからそう軽々しく答えるでない」

「す、す、すいませんでした!」
少女は3人から逃げようとしたが、腰が抜けて動けなかった。そして、そのオドオドする少女に天下のロリコンは興奮を覚えていた。ハアハアと息を上げ、今にも獣となりそうなときよからぬ音が聞こえる。

ぐううう~~~~

「あ、」

「腹が減っているのか?」

「は、腹なんか減ってない!」

「か、可愛ええ……」

2人の拳が純一の顔を捉えた。

「ちよ、一体何事!? まだ何にもしてないじゃん!」

「まだ? ならするつもりだったのだな。ぶつ殺す」

「すまない。僕はただ、お前に犯罪者に成って欲しく無いんだ」

「正論吐いてたらいイと思ってるでしょ2人とも!? 結局俺殴られるからね! 痛いからね!」

少女は少し戸惑っていたが、それに気が付いた和馬がすかさずフオロ!? をする。

「あ、このひと昔からそうなんだ。気にしないで」

「う、……いいケド……」

「貴公。腹が減っているのだったな? 少しくらいならくれてやっても構わないぞ」

少女は、この人達ただけ順応性たかいのよ……まずは私が誰かでしょ……しかも脅しまでしたのにな、と心の中で思っていたのだが、とにかくご飯にあるつきたかった。

「ところで、貴公。名は何というのだ?」

「ふえ? ふあふあふいふあふえふえふえふえれふ」

「口の中無くなってから喋りなさい」

すぐに少女はサンドイツチを飲み込み、ふいーつと言ったあと、軽く胸に手を当てて

「私は、エレル？バレル。このさきの科学都市ノウンのアカデミー卒業第32期生でそこで開発されている龍殺しの研究途中で発案された龍殺しの人工版。通称・龍騎士殺しの能力を持つてる」

「ノウン……確かそんな噂があつたようなきがするな。龍騎士殺し……最近龍が乱獲されているのだ。で、都市伝説レベルだが、その力が関わってるんじゃない？という話を聞いたことがある」

「その都市伝説はこつちでも有名だけど、私は知らないな。もっとも、全員でかかつたら危険度5でも余裕っぽいけどさ」

「そんなにでかいのかその国……」

「ううん。大きさはあんまりだよ。人口が多いの。大体5000万位かな。で、その5分の4位が龍騎士殺しだよ。」

「そのレベルなら私1人で十分そうだがな」

シヤナのトンデモ発言に驚く3人。この金髪少女は4000人をまとめて相手出来ると言い出したのだ。無理もない。シヤナ自身は自分の術式、龍の鎮魂歌ドラゴンクレイムの威力だけで言うたのだ。

「で、私たちをノウンに連れてつてくれるのよね？サンドイツチの恩は返して欲しいものだが」

「シヤナ。ちよつと大人気ないかも」

「何を言うか。私の名はReturn875（必ず返す）だ。自分の名に恥じぬやり方だろうが」

「Oh……マジ外道」

「あん？私が今すぐここで貴様を殺しても構わないのだぞ？この底辺変態野郎が」

「龍の鎮魂歌はやめてね。周囲が吹っ飛ぶ」

「和馬は俺の心配よりも周囲かよ！？」

「何つー会話だよ。一体何者なんだよあんたら」

すっかり忘れていようだったが、エレルは3人のことをまったく知らなかった。当然といえば当然なのだが、まったく気にしていな

いかのように話が進んでいった。

「あ、僕は龍野和馬。龍騎士。終わり。」

「はやっ！自己紹介短！．．．俺は海高純一。龍騎士。和馬の親友
つてところかな。終わり」

「貴公らも人のこと言えんがな．．．．私はシャーナ・ジ・ア
ンケルノ。呼び方は略称のシャナで構わん。龍の鎮魂歌フラグコンレクイエムの術式考案
者だ。い一応龍殺し。どうだ？これでわかったか？」

「どこの人か以外は」

「そうか、言ってなかったな。全員元アンケルノ国の軍人だ」

「国家の軍人って．．．なんでこんなところにいんのよ．．．ま、ノ
ウンには招待するけど。サンドイツチありがとね」

「．．．．．それは良いのだが、なぜ貴女はここにいたのだ
？家が無いわけではあるまいに」

「あ、そうだよね。それ思った」

「俺は幼女とすごせるなら地獄のそこまでついて行くぜ」

「．．．黙れロリコン」

「うっ．．．エレルたんまで俺を見放すのですか!？」

「死ね。クズ」

第6章 く龍騎士殺しく（後書き）

書き溜めなうのですし

第7章 ～白龍系巨龍種～ (前書き)

PCがない状況ですから、不定期更新となります

第7章 ～白龍系巨龍種～

一行は、ノウンに向かうため昼食を軽く済ませてノウンへと歩いていった。

「なーまだ着かないのかー？」

「ロリコンは黙ってればいい。」

「しつこい男は嫌われるよ純」

「だから純って呼ぶなっつてるのに」

「……………（なにか来る！）」

エレルだけが異変に気が付き、何も言わずに3人から離れていく。察知したのは龍の魔力。こういう所がエレルの才能なのだ。察知するだけならば誰だつて出来る。だがエレルは無意識でそれを行い、龍の位置、レベル、大きさ、種類まで把握出来る能力を持っていた。「（白龍系巨龍種…！？どうしてそんなデカイ奴がこんな所に？）」エレルは白龍のいる場所に向かう。彼女は龍騎士殺しであり、アカデミーの首席卒業生なのだ。どんな獲物でも自分で仕留めるというプライドがあつた。エレルは無言で立ち去つた。

そんなことは知らずに3人は歩いて行つた。

「つてかさ、まだなわけ？そろそろマジでしんどいんだが」

「純。シヤナを見てハアハアすれば純のロリコンパワーが充電されるよ」

「そんなことしたら私とその眼を使えぬようにしてやるがな」

「……………ハアハア」

「……………私の言ったことが通じなかつたのか？」

「ジョウダンデスマウシワケゴザイマセン」

「もう手遅れかも」

「覚悟はできているな？」

シヤナの右手が高圧電流を帯び、バチバチと音を立てる。

「一人で行くなんて馬鹿以外の何でもない！」

エレルは龍騎士殺し。オリジナル原型の人工の力でしかない。確かに力はある。だけど、たった一人で龍一匹殺す程の力はないと言ってもいい。でもエレルにはプライドがある。アカデミー首席卒業者としての一歩というプライドが。

「今までこんな問題でも自分で頑張って解いてきたんだから自分でやる！」

エレルの緑色の髪が風で揺れる。そして、凍る。

白龍系の基本属性は氷。基本的な属性は4つ。炎、水、雷、土の4つが基本的には使用される。4大属性の例外に当たる氷を扱う白龍は特殊な龍だった。

龍が咆える。

「チツ。まったく、時間とか客人とか考えて出現してくれてもいいのに……ね！」

龍騎士の基本術式、滅龍の神息を組み上げる。通常、龍騎士殺しにそのような術式を使うことはままならないのだが、エレルはそれを才能によって実現していた。滅龍の神息は白龍の顔面に当たったが大きなダメージは感じられなかった。

「さすが上位ランクと言った所でしようけど、やるしかないのよ！」
滅龍の神息の2発同時使用を行う。右手と左手に展開された術式は通常の倍速でエレルの魔力を消費し、一瞬エレルの体の軸がブレた。その隙を白龍は見逃さない。

白龍はその大きな翼を広げ、空気中の水分を瞬間的に凍らせて氷塊を作り出した。

「……ッ！まっず」

と不意にエレルはつぶやく。

「不完全でも暴発するよりはマシかな」

両手に展開された滅龍の神息を氷塊に向かって放つ。通常の2倍の

魔力を食った滅龍の神息は2倍の威力のまま氷塊に衝突し、粉々に砕け散った。

ダイヤモンドダストのように砕けた氷塊はキラキラと光る。事情を知らぬ者が見れば、ショーでもしているのだろうかと思っただかもしれない。

自らの術を封じられた白龍は腹を立てた子供のように吼えた。

「龍って、言語が私らに理解できないのが難点よね。だからいつまで経っても人間の下にしか居れないってのがわかってないのかしらまあ、今の私の発言も理解しているかどうかともわからないけど」

と、独り言を言うエレルの頭に突然鈍い衝撃が襲った。脳震盪を起こしたエレルはその場に倒れてしまった。

満足そうな咆哮をする白龍。さらにエレルに追い討ちをかけるべく、氷塊をもう一度出現させた。氷塊はまっすぐエレルに向かっていく。

「やらせるかっての！」

魔力の弾が当たる寸前だった氷塊に当たり、弾と一緒に消滅した。そのたまの出所はかのロリコンネ申だった。

滅龍砲は氷塊に当たり、魔力を強制的に0にして消したのだ。

「エーレールたん。一人で行っちゃうなんてだめじゃんか。きましたよーっと」

「行っておくが和馬。せつかくの格好良い所が台無しだぞ」

「うそん」

左手にガントレットをはめた龍騎士、和馬と龍の鎮魂歌を考案した龍殺し、シャーナ・ジ・アンケルノがいた。脳震盪はすでに治っていて、3人の姿を確認したエレルは

「何で来たのよアンタ達。バカなんじゃないの？私をなんて、ただの他人じゃない。どこでのたうちまわって死のうと私の勝ってでしよ。こんなの私一人で十」

「十分じゃねえよ！」

叫んだのは純一だった。

「あと、どこでのたうちまわって死のうが勝ってとか言うのは取り

消せ。これは絶対だ。俺は世界中の口りっ娘を見殺しにできるわけねえ。そのためになら命を捨ててもいいと思っっている。だからな、これだけは言わせろ」

純一は言葉を使うのが下手だ。支離滅裂な文でも、彼には伝えたいことがあった。

「その若さを無駄にするんじゃないねえ！あとの少しの輝ける時間を無駄にするな！！！」

アグネスがかかってこいやああああああ！！！！といわんばかりの発言である。

「…………ふふっ。台無しじゃないの。でも、少しだけ元気が出たわ」
エレルは軽く微笑む。純一は、ブフォーッやべえ…俺もう死んでもいい…とつぶやいている。

「…僕等ってさ、なんか場違いじゃね？」

「…某ライトノベルのローマ 教W氏とM氏の掛け合いを見ているようだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3467v/>

龍騎士物語

2012年1月2日11時45分発行